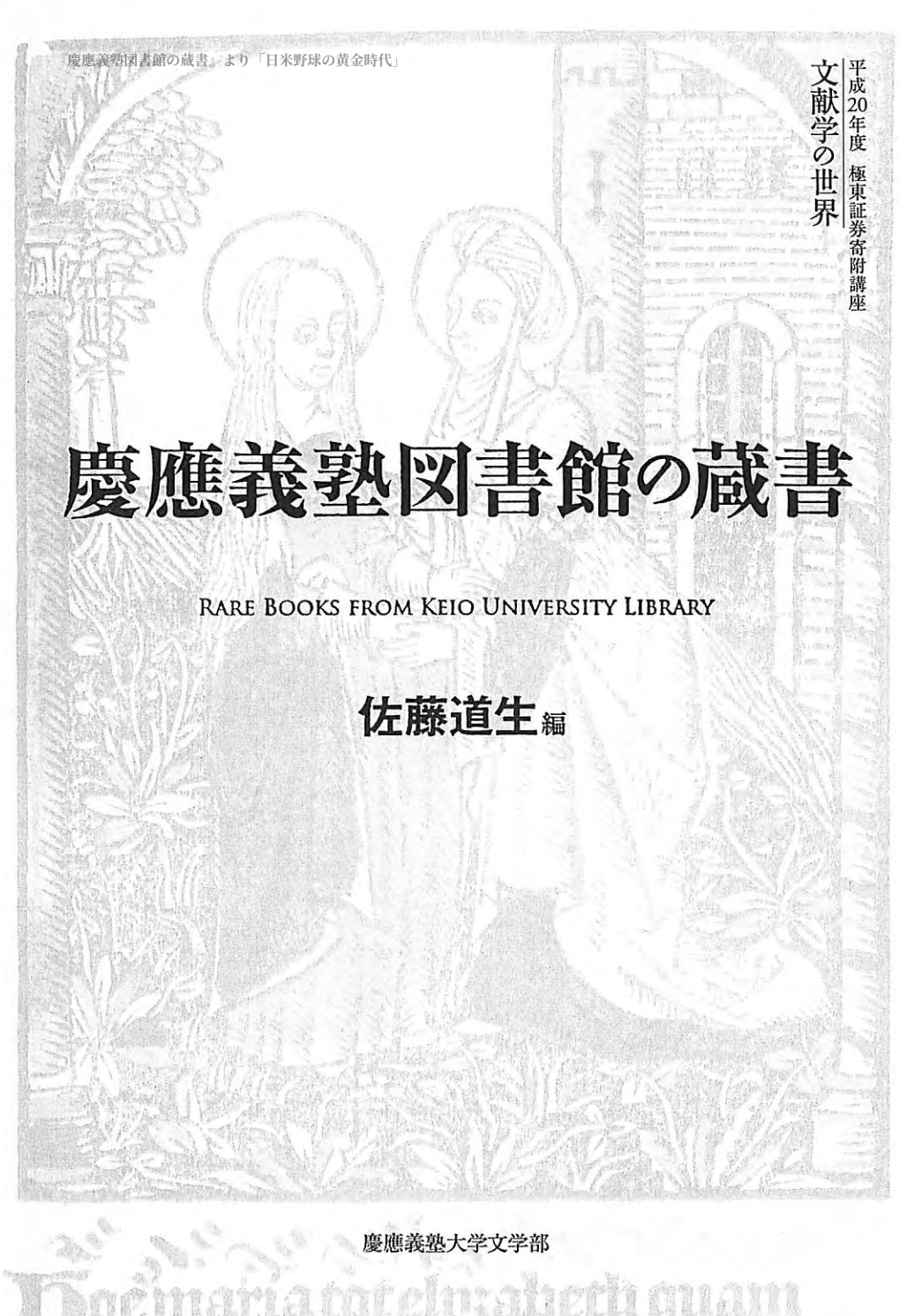
平成20年度 極東証券寄附講座
文献学の世界

慶應義塾図書館の蔵書

RARE BOOKS FROM KEIO UNIVERSITY LIBRARY

佐藤道生 編

慶應義塾大学文学部



日米野球の黄金時代

散逸した藤田コレクション

吉田 恭子

© Kyoko Yoshida

2007年6月5日、マンハッタンアップタウンのサザビーズであるオークションが執り行われた。いつもなら洗練されたスーツ姿の美術関係者が集うであろう競売室、この日は野球帽に松井Tシャツ、ハワイアンシャツにバミューダパンツといった気軽ないでたちの男たちが大部分、立ち見も出る盛況である。会場の奥に控える金髪の女性がハンマーを持った競売人。背後のスクリーンには競売品の映像とともに世界7カ国の通貨で競売価格が刻々と表示される。左手の長テーブルに居並ぶのは世界各地から電話入札を受け付ける社員たち。競売室は一見ロビーのようで仕切りや扉もなく誰でも出入り自由だ。世界の宝物が集散するエスタブリッシュメントとしての自尊が無防備なほどの開放原則と共存するこの場所は、たとえば国会議事堂に似て、実にアメリカ的だ。

オークションは独特の空間をつくりだす。競売人の絶え間ない掛け声に導かれ次から次へと櫂が挙がるさまは、一種独特の競技世界をのぞき見るようだ。競売人の声と電話口のささやき声を除いては吸い込まれるような沈黙の中、5万円、10万円単位でどんどん値が上がってゆく。一品終わればすぐ次の品。儀礼的な間さえなく、またたく間に値の騰がる人気品も競争者のほとんどない品も等しく淡々とさばかれてゆく。競売にドラマがあるとすれば、それはその場に居合わせる人間の脳内にしか存在しない。それがゆえになおさらしびれるような興奮をもたらすことは想像に難くない。

この日私の目的は、故藤田光彦氏の野球関連コレクションの競売を見届け

© Kyoko Yoshida

ることだった。それは合計 366 点にものぼるスポーツメモラビリアオークションのうち冒頭の 40 品で、30 分にも満たない競売の結果、藤田コレクションは日米各地に新たな居場所を見つけ、散らばっていくこととなった。

本稿では藤田光彦の来歴と人柄に触れ、今回福澤研究センターが落札した署名写真 48 枚を紹介するとともに、藤田コレクションの概要説明、そして昭和初頭の野球黄金時代について黒人野球を中心に日米野球交流の多様性の観点から簡潔な描出を試みたい。

1　大日本東京野球倶楽部

日本でも報道された目玉品の 1 つは、競売番号 24、東京巨人軍の前身大日本東京野球倶楽部が 1935 年（昭和 10 年）にアメリカに発つ際、秩父丸の船上で 2 月 14 日に撮ったサイン入り集合写真。監督市岡忠男をはじめ総勢 20 名、沢村栄治とヴィクトル・スタルヒンは共に満 18 歳、108 試合中 105 盗塁を成し遂げた田部武雄ほか野球殿堂表彰者が 8 名、また後に戦没する選手が 5 名。予想落札価格が 4 千から 6 千ドルの品、理想的には野球体育博物館が所蔵すべき品である。

オークションは 2,500 ドルから始まり、1 番後ろの端に座る緑のシャツの中年白人男性が果敢にパドルを挙げ、不在の電話入札と競っていた。私の戯画的想像世界では不在入札者はもちろん日本の個人もしくは団体である。2 者の応酬でトントン拍子に値が上がり、開始 30 秒後、電話入札の 5,500 ドル、これで決まりか。

「最後の付値、大日本サイン写真、5,500 でただいま落札します——」

競売人が宣言し、今まさにハンマーを振り下ろさんとする沈黙の一瞬、今まで見物していた会場の真ん中にいる男性が素手で挙手したのを競売人は見

図 1　競売番号 24　大日本東京野球倶楽部[1]

逃さなかった。

“Six !”

凛々しい彼女の声もこのときだけは張りつめたささやき声になる。最後の付値が宣言される——不在入札者も後ろの男性もまったく動かない。

“Yours, sir, at six. Thank you.”

そしてハンマーの音。

(1) http://www.sothebys.com/app/ecatalogue/ecat.do?dispatch=displayImageViewer&lot_id=159364464&showBigPic=Y.

© Kyoko Yoshida

思わずはーっと大きなため息をついてしまった。

落札を狙う悪玉（？）アメリカ人ディーラーを退け今まさに日本野球史上第１級の宝物を手に入れようとした瞬間、漁父の利を取られたわけだ。

競売では当然会場の競り人が有利だ。他にも不在入札や事前入札が素手の挙手に負けた例は多かった。会場の入札者の中にはファンや研究者もいるが、多いのはディーラーで、この後多くの写真やサインボールがバラ売りでインターネットオークションサイトに登場することとなる。

高額落札はやはり1934年のオール・アメリカン来日関係の品に多かった。藤田コレクションと落札価格の一覧はサザビーズのホームページで閲覧できる[2]。

考えてみれば、なにからなにまでアメリカ側に有利なオークションなのだった。ホームアドバンテージだけでなく、いつはじけてもおかしくないバブル景気はまだ好調、一般人さえアンティークやメモラビリアを投機の対象とした。もともとスポーツメモラビリアのマーケットが発達しているし、今やeBayで世界中に簡単に売りさばける。野球研究は90年代からブームと言ってもよい状態で、ニグロリーグに限っても、毎年買うのが追いつかないほどの本が出版される。SABR（アメリカ野球研究学会）[3]を中心に研究者組織がしっかりしており、日本人研究者も含め、日本野球研究も活発なのだ。特に、野茂を皮切りに日本人大リーガーが活躍するようになってからは、日系や日本初期野球に対する興味も広がった。

（2）http://www.sothebys.com/app/live/lot/LotResultsDetailList.jsp?event_id=28289&sale_number=N08385.

（3）The Society for American Baseball Research

2　趣味人藤田光彦

さて今回のコレクションを収集した藤田光彦とはどういう人物なのだろうか。

藤田光彦（1911–1974）は藤田財閥創業者・藤田傳三郎男爵（1841–1912）の三男・彦三郎の長男として大阪に生まれ、まもなく須磨に移り住み恵まれた環境で育った。旧制神戸三中、浪速高校を経て、京都帝大文学部で田邊元に哲学を学んでいる。父彦三郎も美術収集家だったが、光彦も凝り性で几帳面な性格であり、野球と写真の他にも趣味は多かったようだ。藤田コレクションからは見えてこない一面だが、幼少時はピアノ、絵画、習字のほか、ワルシャワ劇場の元プリマドンナからバレエのレッスンを受けた。米国から野球チームが来阪したおりには１つも逃さずに観戦し、直接写真を撮ってその日のうちに現像し、一族が経営するホテルに滞在する選手を訪れサインをもらっていた。英語が得意で、ベーブ・ルースには打撃のコツを、アール・ホワイトヒルには投球作法を教わったとの逸話がある[4]。競売に出されたコレクションには、1934年来日時のコニー・マックと並んで写った詰襟姿の藤田光彦の姿もある（競売番号14）[5]。日本プロ野球誕生の功労者レフティ・オドゥールとは特に親しかったようだ。

戦後は一転して苦労が続くことになるものの、そのやわらかな物腰と奇行が阪神文化人に愛された。クラシック音楽評論家として活躍し神戸放送のラジオ番組『クラシック登竜門』のレギュラーとして毎週日曜日生放送で青少年音楽家たちにアドバイスを送り続けた。しかしなんといっても藤田を有名

（4）Sotheby's, *Important Sports Memorabilia And Cards*: New York Tuesday, June 5, 2007（New York: Sotheby's, Inc, 2007）, p. 10.

（5）Sotheby's, p. 20.

© Kyoko Yoshida

にしたのは優雅な蛾食の奇行であった。

音楽評論家吉村一夫の短文が後年の藤田の人となりをよく描いている。

神戸の三奇人とか呼ばれる人達の中で確実に首位を占めそうなのが藤田光彦先生である。惜しくも数年前故人になられたが、これほど珍談、奇談を折目正しく、厳粛に行える人は少い。[中略]

日常「御座います」言葉を崩さない折目正しさは、私達庶民には異様であるが、それよりも坊主頭に戦前のロンドン・スタイルの洋服、時には、古くなって裏返したため胸のポケットが右側になっているものを一着に及び、手には椎茸の生えそうな古鞄。それも無器用なつぎはぎのある古色蒼然たる代物をぶらさげて、何処の演奏会場でも最後列の最右端を定席にして、例の鞄からメモ用カード（少なくとも三種類はある）オペラ・グラスを取出して、御満悦のご様子である。[中略] 相続のことで不幸にも裁判沙汰になり、大事な法廷が開かれる日でも、大阪で聞いた音楽家の東京の公演曲目に一曲異なるものがあるというだけの理由で欠席するのには感心を通り越して呆れられた。それほどコリ性の人であった。猫を三十六匹飼って毎晩点呼して一匹でもいないと家の内外を奥さんも動員して大捜査である。[中略]

藤田先生の名声を確立したのは、なんといっても、蛾を食べることである。テレビで実演されたこともあるほどでその名声はひろく知れ渡っていた。当時、芦屋の高台に住んでいた私は、八月の誕生パーティを毎年拙宅で開いて、天気が良ければ戸外で十数人の日頃親しい人だけを招いて毎年開いていたが、そのパーティの呼びもののアトラクションは、藤田先生の蛾食い実演であった。茶色の雀蛾を一夜に三〇匹も食べるので、最初のうちは蛾がとんでくると身を避けていた連中も、蛾を手掴みにして差出すと「有難う御座います」と丁寧にお礼をいって口に入れると、羽をバタつかせるので口の辺りに茶色の粉がつく。その隣の席に座っていた現朝日放送社長の原清氏が「今、プチッと音がしたから、お汁が出てますわ」と実況放送が続く。その有様をかたずを呑んで、二十四ぐらいの瞳が見守るのである。恐る恐る「どんな味ですか」と聞く人がある。「丁度チョコレートとヌガーとを一緒にしたような味で御座います」と丁重な返事が戻ってくる。誰も感心したような声を出すだけで、逆らう人はない。疑わしいような声を出せば「欺されたと思って、是非、お召し上って見て下さい」とすすめられるので、誰も異論を唱える人はない。蛾を二本の指でつまんで、蛾の顔を見つめ「この可愛らしい目」と感嘆の声と共に口に入れ、噛み切ってそのジュースを楽しんで、羽と角の角質部だけを静かに口の中から取り出す。気品高いお召し上りかたである。[中略]「蛾を喰べて身体に変調はありませんか」と問う人がいた。答えは、「夏に新鮮な蛾を沢山喰べておくと冬になっても風邪をひきません。最も素晴らしい蛾の味は関西汽船の船上で捕えた瀬戸内海の蛾が最高でした。芦屋の蛾もそれに次ぐ結構な味で御座いました」とお世辞も忘れない優雅さである[6]。

(6) 吉村一夫「私の交友録〈最終回〉藤田光彦」、32–33 頁。誌名は不明である。筆者がサザビーズより譲り受けたコピー資料の一部。頁のサイズ（17 × 18 センチ）や内容から阪神地方の財界誌ではないかと推測される。吉村の連載なのか、リレー方式の連載なのかは不明。藤田他界後の記事であるので 1980 年頃のものか。1966 年に撮影された集合写真が載っている。

© Kyoko Yoshida

3　藤田コレクションとは

藤田光彦が学生時代自ら撮影した日米野球選手の写真千余点が藤田コレクションの基礎となっている。写真の多くは署名入りで、これに計55個のサインボールと数点の記念品が加わる。ジョー・ディマジオ関連の品を除いては、すべてが昭和はじめの10年間、日米野球の黄金期に収集されたものである。

藤田コレクションの第一の魅力は、日米の大スターたちのいきいきとしたスナップショットが、鮮明なサインとともに保存されていることだ。誰もが知るとおり、当時野球の花形は六大学野球であった。写真は阪神地区で撮られたものだが、六大学選手の数の多さからしても彼らの人気が察せられる[7]。また新聞では日本の試合ばかりでなく大リーグのペナントレース、ワールドシリーズの結果が逐一報じられた。1934年ベーブ・ルースを筆頭とするオール・アメリカンチーム来日の歴史的インパクトについては繰り返すまでもないだろう。

だがこのコレクションにはさらなる奥行きがある。現代では忘れがちな日米野球交流年代記としての側面である。黒人オールスターチームの巡業、クラブチームの親善ツアー、アメリカの大学チーム訪日、そして二世野球とハワイチームの来日の記録がこれにあたる。1980年頃までの野球史観は大学エリートと大リーグスター来日を軸に上からの目線で展開するのが主流だった[8]。近年野球史研究が盛んになり、日米野球交流の多様性が記述されるよ

(7) 中学野球は西日本に強豪が多かったから、慶應の野球部員にも四国・中国・関西出身者は多かった。昭和初期の兵庫出身慶應野球部員については市居嘉雄著『昭和前半の慶應義塾野球史と東京六大学リーグ戦の球場をたどる』(曙文庫、2008年)に詳しい。

(8) 池井優『白球太平洋を渡る——日米野球交流史』(中公新書、1976年)など。

うになった。藤田コレクションに繰返し顔を出す腰本寿慶應野球部監督(1894–1935)もハワイ出身であったように、当時の六大学選手には合衆国生まれの二世も多かった一方、六大学野球の盛り上がりが西海岸の二世野球に飛び火したという逆輸入的側面もあり興味深い。例えば、永田陽一『ベースボールの社会史——ジミー堀尾と日米野球』は堀尾文人(1911–1949、図1後列右から3人目)の生涯を通して二世野球と黎明期日本プロ野球の関係を詳細に描く。戦前から戦後にかけての野球交流が、いかに層が厚く多様性に富んだものであったか、巻末の年表を見るだけでも一目瞭然だ[9]。

野球はなんといってもアメリカのスポーツだった。だからこそ、日本人選手らは、渡米を繰り返し本場から技術を学ぼうとする一方で、自分たちがベースボールに魅せられたことを正当化するかのように、野球の日本化に必死に取り組んだ。それは、大和魂野球であり、また、アメリカ人に勝ってこその野球だった。同じことが米国移民の野球にも言える。アメリカ人としてのアイデンティティをベースボールが保障した。当時人種別のチームが多かったから、マイノリティーとして地域のチームでアマチュア、セミプロとしてプレーすることは、アメリカ市民としての同化の証であると同時に、自らの民族的出自を誇りとともに再確認する作業となった。ベースボールをプレーし続けることが、アメリカ国家建設参加のシンボルとなり、だからこそ政治参加や抗議の手段ともなりえた[10]のである。

(9) 永田陽一『ベースボールの社会史——ジミー堀尾と日米野球』(東方出版、1994年)。

(10) 野球史を合衆国民主化のメタファーとして最も明確に捕えてみせたのは、Ken Burns のドキュメンタリーシリーズ *Baseball* (PBS, 1994) である。これ以降野球研究の認知が飛躍的に高まった。

© Kyoko Yoshida

藤田コレクションを見渡すと、当時の日米野球界の活況が広がりのある全体像として浮かび上がってくる。以下コレクションの概略を示す（数字は競売番号）。

1　1928年大阪毎日新聞野球団親善ツアー
2　1928年から1954年にかけて来日した米国人選手のサインボール
3　1931年大リーグ来日ツアー関連
4–7　1932年来日フィラデルフィア・ロイヤル・ジャイアンツ関連
8–23　1934年大リーグ来日ツアー関連。ルース、ゲーリッグ、フォックスら
24　1935年大日本東京野球倶楽部署名入り集合写真
25　レフティ・オドゥールの両手レントゲン写真と日本の医師による診断書
26　1954年、ディマジオ、モンロー、オドゥールのサイン
27　日本野球殿堂表彰者署名入り写真41点（1920年代から1930年代のもの）
28　早稲田大学野球部コレクション69点
29　早稲田の投手、谷口五郎の陶器人形
30　慶應義塾大学野球部コレクション48点
31　二世野球、ハワイ野球関連コレクション89点
32　六大学野球サインボール8点
33　二世野球、ハワイ野球サインボール11点
24　日本セミプロ、学生野球サインボール10点
35–36　アメリカ大学来日ツアー関連
37–40　「藤田アルバムA-D」（その他の写真）[11]

(11) Sotheby's, pp. 10–33.

図2　慶應義塾福澤研究センター所蔵写真12番、1935年のキャプテン土井寿蔵

ところで野球のサインボールやスナップ写真に文献学的価値はあるのだろうか。今回の藤田コレクションにあるのは（I）記念価値と（II）史料価値。文物によって前者のみのもの、前者と後者の2つの価値を持つものとに分けられるし、時代によってそのバランスも変化するだろう。

（I）記念価値には①収集品としての記念価値と、②記録品としての記念価値がある。①収集品の価値はいわゆるメモラビリアとしての価値であり、選手が有名であればあるほど、サインが鮮明であればあるほど、物品が珍奇であればあるほど市場の原則に従い金銭的価値が上昇する。大毎ユニフォーム姿のタイ・カッブの署名写真（競売番号1）や1920年のヤンキースブロマ

© Kyoko Yoshida

イドに14年後ベーブ・ルースが日本でサインしたもの（競売番号15）がこれにあたる。②記録的記念価値とは、歴史を後世に伝え残す役割を果たすもので、その意義はさまざまだ。たとえば大日本東京野球倶楽部の集合写真（競売番号24、図1）は日本野球史の記念品として多大な価値を持つし、戦前の野球青年らのくつろいだ笑顔は遠い過去を一瞬のうちに見るものの面前に引き寄せる力がある。あるいは二世球団の記念写真（競売番号31）。写真があるという事実だけで、球団の存在が伝承されるきっかけとなる。これは（II）史料価値でもある。この中には、チームが不明の写真もあり、今後の研究が待たれる。また、1932年のフィラデルフィア・ロイヤル・ジャイアンツの集合写真（競売番号4、図4）は、巡業参加者の新情報をもたらした。

4　フィラデルフィア・ロイヤル・ジャイアンツ

そもそも私が藤田コレクションに興味を持ったきっかけが、フィラデルフィア・ロイヤル・ジャイアンツであった。

20世紀初頭から1947年まで変則的に続いたロサンゼルスのカリフォルニア・ウィンター・リーグは米国史上初めて人種統合を実現したプロリーグである。同じチームで白人と黒人がプレーすることはなかったが、黒人チームがリーグ戦に参加する形式が定着し、これが観客を呼ぶ目玉となった。それこそがフィラデルフィア・ロイヤル・ジャイアンツという黒人オールスターチームである。都市名はあくまでイメージ戦略の一環、フィラデルフィアとはなんの関係もない。本拠地はロサンゼルス南部の黒人居住区にあったホワ

(12) William F. McNeil, *The California Winter League: America's First Integrated Professional Baseball League* (Jefferson: McFarland & Co, 2002).

イトソックス第2球場で、観客の7割が黒人だったという。ニグロリーグの強選手とセミプロ選手からなり、マイナーリーグや大リーグの現役選手からなる白人チームを打ち負かしてほとんど毎年のように優勝していた時期があった[12]。

1927年（昭和2年）に来日巡業した黒人球団フィラデルフィア・ロイヤル・ジャイアンツは、このウィンターリーグ優勝チームのメンバーを軸に、監督グッドウィンが取り仕切っていたもう1つの地元黒人セミプロチーム、ホワイトソックス、通称ベアキャッツの選手6名を加えて結成された混成チームである[13]。初回はロサンゼルスの日系人らの後押しで来日した[14]。

1927年の来日における日系人社会の役割を調べていくうちに、ロサンゼルスの全米日系人博物館から、映画 *American Pastime*（2007年、邦題『俺たちの星条旗』）製作者ケリー・ヨー・ナガノ氏を紹介され、そこからボルティモア在住の野球史研究家ボブ・ルーク氏とメールで情報のやりとりをするようになった。彼は退職後社会学の博士号を取得する一方、20世紀前半の名アンパイア、ビル・マッゴーワン[15]や、ニグロリーグ選手“エル・ディアブロ”ことウィリー・ウェルズの伝記[16]を出版したベテランだ。現在、ジョシ

(13)「色の黒い大坊主連の舶来野球団来る――打撃率三割六分守備率九割八分強味は四人の投手」（『横浜貿易新報』、1927年3月29日）、5頁。

(14) マネージャーの入江譲治（戸籍名兼市）はリトル・トーキョーで便宜社なる事務所を運営し、安田義哲が社長を務める日米興行の秘書だった。入江は後年ダンサー伊藤道郎のマネージメントも行った。日米関係の悪化後帰国し太秦で映画業に就いている。これらの人物については以下を参照。松本本光『加州人物大観（南加の巻）』（ロサンゼルス：昭和時報社、1929年）、260–61、470–72頁。

(15) Bob Luke, *Dean of Umpires: A Biography of Bill Mcgowan, 1896-1954* (Jefferson: McFarland, 2005).

(16) Bob Luke, *Willie Wells: "El Diablo" of the Negro League* (Austin: U of Texas P, 2007).

© Kyoko Yoshida

ュ・ギブソンと並んでニグロリーグを代表するキャッチャー、ラーリー・“ビズ”・マッキーの生涯を調べている。マッキーは来日したフィラデルフィア・ロイヤル・ジャイアンツのキャプテンでもあり、神宮球場初のホームランを放った選手である。2005年に野球殿堂入りしている。

ルーク氏とは野球殿堂の村クーパーズタウンで会う機会があり研究の示唆を得ることができた。ビズ・マッキーの姪孫レイ・マッキー氏もテキサスから合流し、マッキー研究決起集会の趣であった。殿堂博物館にはちょうどマッキーが使用したプロテクターとミット一式が展示されていた。

クーパーズタウンから1週間たらずのこと。ルーク氏から興奮気味のメールが届いた。1932年日本巡業チーム全員のサインが入った集合写真がニューヨークでオークションにかけられるという。にわかに信じがたく、メールで写真を見せられて驚いた。野球ファンにとって目当ての選手のサインは格別だが、ニグロリーガーについては直筆の遺物が特に稀なのだ。プロ野球選手の識字力はもともとデリケートなトピックだが、ニグロリーグ時代はジムクロー法成立初期から市民権運動直前の時代に当たり、黒人の教育があらゆる手段で阻まれた時期と一致する。マッキーは長いキャリアのうちで徐々に読み書きができるようになったのではないか、というのがルーク氏の持論であっただけに、サイン写真の出現は意義深かった（図3）。

オークション前なら自由に見ることができるとのことで、早速ニューヨークの本社に赴いた。担当はスポーツ文物専門のケヴィン・シュワルツ氏、長身にダークスーツと赤いコンバースの組み合わせがよく似合う台湾系の好青年。入札するわけでもない私の質問に親切に答えてくれて藤田コレクション以外の品も気前よく見せてくれた。たとえばレフティ・オドゥールが日本でゲイシャの扮装をしたときのカツラ、とか。ベーブ・ルースのバットはずっしり重かった。件の集合写真はデジタル化したものをあらかじめ見てはいた

図3　1932年11月5日、神戸球場にて[17]

のだが、実物を前にすると当時の写真の小ささに改めて驚く。チーム15人と見物人がひしめくわずか8×5.7センチのセピア色の写真に今ここからの遠さを痛感させられる一方で、エースでもう一人の殿堂入り選手、アンディ・クーパーの首を傾げたお茶目な笑顔に奇妙な親近感を覚えてしまう（後列左から3番目。マッキーは前列左から3番目）。

フィラデルフィア・ロイヤル・ジャイアンツの来日については、佐山和夫の『黒きやさしきジャイアンツ』（ベースボール・マガジン社，1986年）が現在も最良の文献だ。英語文献は同じく佐山の論文が1つある[18]。これらはア

(17) http://www.sothebys.com/app/live/lot/LotDetail.jsp?lot_id=159364454.

© Kyoko Yoshida

メリカでニグロリーグ研究成果が続々出版される前に出たもので先駆的価値が大きい。

来日の様子を知るには、当時の雑誌や新聞、とりわけ地方紙を参照することになる。ところが外国人名についてカタカナ表記がまことにまちまちで、特に2度目の来日については初回ほど報道の注目を浴びなかったため、固有名の記録が心もとない。監督名さえもはっきりしない。今回藤田光彦の写真で全員の名前が明らかになった[19]。監督が初回巡業と同じグッドウィンで、プロモーターはハワイのL. G. ノダである。チームはニグロリーグのオールスターとセミプロの混成で、1927年はグッドウィンの出身地南テキサス生まれの選手中心だったが[20]、1932年はキューバ人選手が数名参加している[21]。

(18) 英語文献は "'Their Throws Were Like Arrows': How a Black Team Spurred Pro Ball in Japan." *Baseball Research Journal* 16, 1987. 85–88. またニグロリーグ一般を扱った邦文献として、佐山和夫『黒人野球のヒーローたち――「ニグロ・リーグ」の興亡』(中公新書、1994年)。

(19) Sotheby's, p. 14. 監督 Alonzo Alfred Goodwin。プロモーター L. G. Noda。選手12名は以下の通り。 Raleigh "Biz" Mackey*, Andy Cooper*, Hallie Harding*, Alfred Bland, "Tank" Carr*, Jose Perez, William Martin*, "Showtime" Evans, William Ross*, V. Chicho [Checho とも], Clemente Delgado, & Henry Baker*. 以上＊印の者はニグロリーグでプレーした記録がある。James A. Riley, *The Biographical Encyclopedia of the Negro Baseball Leagues* (New York: Carroll & Graf, 1994).

(20) www.ancestry.com 参照。*S.S. City of Los Angeles* でホノルルから7月2日にロサンゼルス入港。選手13名のうち6名がテキサス出身。マッキーの南テキサス時代のキャリアについては以下参照。David King, *San Antonio at Bat: Professional Baseball in the Alamo City* (College Station: Texas A & M UP, 2004), pp. 48–54.

(21) Delgado と Perez、あと写真にないキューバ人選手が1名いる。www.ancestry.com 参照。選手らはマニラを1932年12月9日に出港した *S.S. President Lincoln* で翌月14日にロサンゼルスに到着した。

5　慶應義塾大学野球部サイン入り写真コレクション

藤田コレクションはサザビーズから依頼を受けた専門家により鑑定され、テーマ別に分類され競売に付された。よって「早稲田コレクション」「慶應コレクション」といった分類は藤田光彦によるものではない。

福澤研究センターが取得した48枚の写真（競売番号30）について以下表に記す。1926年（大正15年）から1935年（昭和10年）にかけて、六大学野球全盛期、とりわけ慶應にとっては腰本監督のもと六大学リーグ戦で10戦10勝した時期とその直後監督不在の不振期にあたる。慶應ユニフォームの他、三田倶楽部や大阪毎日新聞、高松商業のユニフォームも見られる。写真は関西遠征の際、甲子園球場など関西近郊の球場[22]で撮られたものと推測されている。のち金属回収で戦時供与される甲子園の鉄傘がところどころ背景に見える。裏書のある写真はなかった。

2008年時点で塾出身の野球殿堂表彰者は17人に上るが、うち当コレクションにあるのは7名（小野三千麿、宮原清、宮武三郎、腰本寿、水原茂、桐原真二、山下実）。

(22) 三田倶楽部編『慶應義塾野球部百年史　上巻』(三田倶楽部、1989年) によると、この時期甲子園のほか鳴海、宝塚、寝屋川、京都岡崎の球場で試合をした記録がある。

© Kyoko Yoshida

No.[23]	サイズ[24]	人数[25]	署名（服装）[26]	入部年、出身[27]	その他
1	大	1	宮武三郎（TAKASHO）	1927 高松商業	
2	大	1	橋本清（MITA CLUB）	1926 年卒	
3	大	1	三宅憲太郎	1930 北野中	
4	大	1	高橋喜朗	1929 高松中	
5	大	1	腰本寿	1926－1935 監督	
6	大	1	宮武三郎		
7	大	1	中村好男	1931 諏訪蚕糸	
8	大	1	町田重信	1926 神港商業	
9	小	2	不明		
			三宅憲太郎		
10	小	2（1）	山下好一	1932 和歌山中	No.12 と同日か
11	小	3	堀達治	1932、33 外野手	
			佐藤森男（KWANSAI）	関西大学	
			不明（KWANSAI）		
12	小	2（1）	土井寿蔵	1930 和歌山中	図 2
13	小	2（1）	碣石俊夫	1930 高松商業	
14	小	2	塚越保	1928 下妻中	
			井上高明（シャツに学帽）	1934 卒マネージャー	
15	大	1	土井寿蔵		
16	大	1	小川年安	1930 広陵中	
17	小	1	土井寿蔵		
18	小	2（1）	腰本寿（私服）		
19	大	1	三宅憲太郎		
20	大	3	吉川清（全て私服）		図 6
			腰本寿		
			小野三千麿		
21	大	1	高浜益男（MITA CLUB）	1923 卒	"Mars" Takahama と
22	大	1	岡田貴一（MITA CLUB）	1931 卒	
23	大		後藤正	1931 神港商業	
24	大	1	碣石俊夫		
25	大	1	桐原真二（MITA CLUB）	1920 入部・戦没	日付入 1931
26	大	1	水原茂	1928 高松商業	
27	大	1	小野三千麿（DAIMAI）	大阪毎日新聞	日付入 1928
28	大	1	井川喜代一	1928 高松商業	
29	大	5（3）	勝川正義	1931 愛知商業	
			平桝敏男	1931 広陵中学	
			後藤正		
30	大	9（6）	Kentaro ？（MITA CLUB）		図 4
			桐原真二		
			不明		
			Matsumura ？		
			岡田貴一		
			橋本清		

31	大	1	腰本寿		
32	小	1	宮武三郎（チーム不明）		図 5
33	大	1	Kiyoshi Okada ？		
34	大	1	富樫与一（私服）	1916 卒	
35	大	1	水原茂		
36	大	4（2）	嶋本篤二郎	1927 滝川中学	図 7
			井川喜代一		
37	大	1	中村好男		
38	大	1（0）	（MITA CLUB）		
39	大	1	土井寿蔵		keio B. B. T. と
40	大	1	宮武三郎		
41	大	1	山下実	1927 神港商業	
42	大	2（1）	水谷則一	1928 愛知商業	
43	大	2	不明（共に私服）		
			富樫与一		
44	大	3（2）	小野三千麿（MITA CLUB）	日付 1930	ダグアウト
			土井寿蔵		
45	大	3（2）	吉川清（共に私服）		No. 20 と同日か
			小野三千麿		
46	大	5	○川信義？（全て私服）		
			宝木原寿		
			戸山敏夫？		
			腰本寿		
			不明		
47	大	4（2）	碣石俊夫	1933 年時共に 3B	甲子園ホテル[28]前
			水原茂		
48	大	4（3）	吉川清（全て私服）		4 人目は児童
			不明		
			宮原清	1902 卒	

（23）番号は筆者による。アルバム左上から、右上、左下、右下の順序。
（24）「大」はおよそ 11.0–11.5×8.0–8.5cm、「小」はおよそ 8.0×6.0cm。
（25）括弧内の数字はサインの数。
（26）特に注記のない限り胸に KEIO 表記のユニフォームを着用。
（27）『慶應義塾野球部百年史　上巻』参照。
（28）現武庫川女子大学甲子園会館。

© Kyoko Yoshida

図 4　慶應義塾福澤研究センター所蔵写真 30 番

図 5　慶應義塾福澤研究センター所蔵写真 32 番、宮武三郎

図 6　慶應義塾福澤研究センター所蔵
写真 20 番、吉川・腰本・小野

図 7　慶應義塾福澤研究センター所蔵
写真 36 番、嶋本・井川

© Kyoko Yoshida

6　浜崎真二とニグロリーグ

ここで日米野球交流について本稿で特に注目してきた黒人野球と慶應野球部に絞って両者の関係を塾出身の浜崎真二（1901–1981）を通して紹介したい。実は浜崎の姿は慶應コレクションに見当たらない。1928年の慶應第3次米国遠征ごろチームとそりが合わず、帰国後1929年に卒業するまで野球部でプレーしていない上、卒業するなり南満州鉄道に就職したからだ。

1927年、フィラデルフィア・ロイヤル・ジャイアンツ最初の日本巡業の様子は、在京のスポーツ専門誌のみならず、全国の地方紙で詳細に報道されたが、その注目度を象徴するのが『野球界』5月号の表紙、巨人軍で一番背の高かったO.ニール・プレン捕手が、自称5尺2寸身長154センチの浜崎と握手を交わす写真である（図8）。巨人軍日本での最初の試合は、4月1日から神宮球場で慶應OBを中心とする三田倶楽部との2連戦で、巨人軍が2対0、10対6で勝っている。浜崎は初日ライト、2日目は先発出場で打率10割の活躍をした。

初日の試合の捕球を興奮冷めやらぬ様子で回想した浜崎の言葉が『野球界』に残っているが[29]、浜崎の自伝ではその思い出は語られていない。なんと言っても学生時代一番の思い出はアメリカ遠征だった。移民県広島出身の浜崎は方々で歓待される。一行はシカゴを経て東進し、フィラデルフィアに到る。

> フィラデルフィアでおもしろかったのは、黒人セミプロのチームとの試合だった。セミプロのせいか、われわれが珍しいのか、渡米以来最高

(29) 濱崎眞二「左利であつたのが幸ひ」、『野球界』（1927年6月）、108–09頁。

図8　プレンと浜崎

の入りだった。

フィラデルフィアは黒人の多い街だ。それで黒人のセミプロチームなどがあるわけだが、当時黒人はまだ大リーグからは締め出されておった。うまい選手でも大リーグへはいけない。そんなだったから、日本の大学チームとやるということが、反響を呼んだのかもしれない。

なにしろ、相手はセミプロチームなのだから、われわれはいいようにあしらわれて負けた。イリノイの試合では、スタンドは若い女性で埋まったが、フィラデルフィアでは黒人で埋まった。彼らが笑うと白い歯がスタンドに一列にずっと光って帯のようになる。

© Kyoko Yoshida

これは初めてみる奇観で、なんだか異様な感じを受けたものだった[30]。

この「セミプロチーム」が実は、フィラデルフィア郊外のダービーを本拠地とするイースタン・カラード・リーグ（ECL）の強豪ヒルデイル・デイジーズで、ビズ・マッキーは1923年から1931年にかけてヒルデイルでプレーしていた[31]。神宮での対戦から約1年後、5月12日の試合の様子は以下の通り。「ヒルデールはセミプロの間には相手がないと云われているだけに一寸歯が立たない。浜崎、島本［篤二郎］は散々打たれ10対5で敗れた。よく打つし、足の早い［ママ］のと、滅茶苦茶にその足を利用してスチールするのには悩まされた。しかし慶應もよく打ってヒット11本であった」[32]。歯が立たないのはもっともで、ヒルデイル、1923年から3年連続ペナント優勝、1925年には5勝1敗の成績で宿敵カンザスシティ・モナクスを下してカラード・ワールド・シリーズ優勝を果たしている、つまり、全米一の黒人チームだったのだ。1926年にはコニー・マック率いる大リーグのアスレチックスとエキシビション・ゲームを行い5勝1敗の結果を残した。1928年当時、ヒルデイルは財政悪化でECLから脱退しており、リーグ戦が組めなかったことも対慶應戦にファンが殺到した一因だろう[33]。

ところで、フィラデルフィアの約1週間前、5月3日に、遠征軍はロサンゼルスの邦人チームL. A. ニッポンと試合をし、8対5で負けている。

この試合が行われたのがグッドウィン率いるセミプロチームホワイトソックスとフィラデルフィア・ロイヤル・ジャイアンツの本拠地、白人のナイトクラブオーナー、ジョー・ピローネが所有していたホワイトソックス第2球場だ。そもそも球場を介したL. A. ニッポンとグッドウィンのつながりがロイヤル・ジャイアンツ来日のきっかけを作ったことは想像に難くない[34]。当時、L. A. ニッポンの悲願は自前の球場を持つことだった。練習や試合の度に市営球場や黒人用のホワイトソックス球場を間借りするのに相当肩身の細い思いをしたようで、在ロス日本領事に球場建設資金援助の依頼をしたり[35]、資金作りのチャリティゲームをした記録が残っている[36]。

さて、ニューヨークでは5月20日にブルックリンを本拠地とするブッシュウィックを浜崎は完封している[37]。元大リーグ選手もいるセミプロチーム

(30) 浜崎真二『48歳の青春――球界彦左自伝』（ベースボール・マガジン社、1983年）、90頁。
(31) Riley, p. 502. John Holway, *The Complete Book of Baseball's Negro Leagues: The Other Half of Baseball History* (Fern Park: Hastings House Publishers, 2001), pp. 238–39.
(32)『慶應義塾野球部百年史　上巻』、177頁。
(33) Mark Ribowsky, *A Complete History of the Negro Leagues: 1884 to 1955* (New York: Citadel P, 2002), pp. 132–34.

(34) 1927年、黒人巨人軍と同時期、フレズノ体育協会も訪日していた。フレズノはカリフォルニアでグッドウィン監督のホワイトソックスに勝利しており（"Fresno All-Stars Beat Los Angeles Crack Team, 9 to 4," *The Fresno Bee* July 5, 1926, p. 10; "Fresno All-Stars Win Again from L.A. Team, 4 to 3," *The Fresno Bee* July 6, 1926, p. 10）、来日巨人軍にホワイトソックスの選手も混ざっていたことから、2つのチームを混同、日本の記者に「このチームには勝ったことがある」と発言し、これが対戦前に報道され、向かうところ敵なしだった巨人軍を倒せるのは同じく日本で全勝の成績を収めていたフレズノだけか、と日本人の期待が高まった。一方、報道の内容を知った巨人軍選手、特にニグロリーグのスターらは、誤解の背景を知らなかったため、フレズノが虚言で巨人軍を貶めようとしていると受取ったようだ。対フレズノ戦で巨人軍はまったく容赦しなかった。エースのクーパーが登板、マッキーの特大ホームランも加わり、9対1でフレズノを下した。
(35) 国立古文書館アジア歴史資料センター蔵「体育並運動競技関係雑件　第一巻44. ロスアンゼルスニ於ケル邦人運動場関係」大正15年。（www.jacar.go.jp）
(36)『羅府新報』、1926年8月13日、16日、23日、29日、31日、9月3日。
(37)『慶應義塾野球部百年史　上巻』177頁。

© Kyoko Yoshida

Japanese Beat G. U. With 4 Home Runs

Nipponese 'Babe Ruth' Hits Second Circuit Clout in Tenth.

Ambassador Sees Keio Nine Make 4 Homers to Win, 14-11.

By ARTHUR A. HEYWOOD.

SLUGGING JAPANESE BALL TEAM WHICH BEAT G. U.

図9　ジョージタウン大学との試合で山下実のサヨナラ本塁打を報じる新聞記事[38]

で、ブルックリンという土地柄か黒人ファンが観客席を埋めた。「試合が済むと、取りかこまれて握手攻めにあった。ぼくばかりじゃない、全員が“ブラック・パワー”に揉みくちゃにされた」[39]と浜崎は回想する。はるばるやってきた日本の学生が白人チームを負かしたことへの賞賛だろう。この試合や“ベーブ”山下の活躍の報道が、続く試合の入場者増に貢献した。

それから約20年、戦後プロ野球が再開され、1947年浜崎は阪急ブレーブスのプレーイングマネージャーに就任する。1952年、阪急はハーレム・グローブトロッターズの興行師エイブ・セイパースタインの仲介を得て、ニグロリーガーを外国人選手として獲得する。監督浜崎もそれを後押しした。す

(38) "Japanese Beat G.U. With 4 Home Runs," *The Washington Post* May 15, 1928, p. 15.
(39) 浜崎、94頁。

でに大リーグは人種統合を経て、スターも客も奪われたニグロリーグはメジャーのファームと化しやがて終焉を迎えようとしていたが、ジョン・ブリトンとジミー・ニューベリー、続いてジョーナス・ゲインズ[40]、ラリー・レインズは阪急ブレーブス「夜の勇者旋風」に大いに貢献した。

自伝によると浜崎が2リーグ分裂後の阪急をやめた主要因も、黒人選手による戦力強化をめぐって小林米三社長と意見対立したことだという。「黒人をとらんということは、裏を返せば、ぼくにやめろというのと同じじゃないか」と球団側に交渉を迫るが、結局望みは果たされなかった[41]。

浜崎真二ひとりの例からも、ニグロリーグと日本野球の関係は、黒人ジャイアンツの初来日以来ニグロリーグ終焉期までさまざまな形で続いたことがわかる。

おわりに

タイムカプセルの中からある日ひょっこり出てきた宝物、それが藤田コレクションだ。80年前の個人的な記念品の数々がほぼ完璧な状態で保存されていた。写真の多くに署名があり、昭和初めの10年の日米野球交流をよく網羅している。世間ではベーブ・ルースのサイン写真、沢村やスタルヒンを含む大日本東京野球倶楽部の集合写真の出品が報道され話題となったが、それだけでは単なる国民的イベントの記録で、このコレクションの真のすばらしさは、六大学の地方遠征ばかりか、荒谷球団やフレズノ体育協会をはじめ

(40) ルーファス・ゲインズとも。
(41) 浜崎、188、223－28頁。

© Kyoko Yoshida

とする日系野球団の来訪、当時毎年のようにあった大学チームの訪日遠征、その全貌が近年になってようやく明らかになりつつある黒人チームの巡業など、当時のファンならば見逃さなかったであろうイベントの数々が記録されていることにある。わたしたちは凝り性で几帳面だった収集家の青年の人柄をしのぶとともに、彼に感謝せずにはいられない。この記録を見るときプロ野球以前の野球黄金期を一ファンの目の通して振り返ることができる。

コレクションが競売され散逸したことについて批判は免れえないだろう。事前にサザビーズから日本の関係者へ情報提供と入札働きかけがあったにもかかわらずオークションへの日本側からの参加意欲は薄かったと聞く。なんといっても大学や博物館といった関係団体の資金不足が大きい。突然のオークション出品に臨機応変に対応できる予算がない。またコレクションをそっくりたとえば野球体育博物館へ寄贈するのが筋であるとする考えも多かったはずで、入札をためらう背景となったのではないか。

しかしながら、もしコレクションが日本国内の施設にそっくりそのまま寄贈されていれたとしたら、それが野球研究全体にどれだけ貢献することになったであろうか。このコレクションは昭和初期の野球に限定しているとはいえ、先にも述べたように、大学野球、（旧制）中学野球、二世野球、メジャーリーグ、ニグロリーグと多岐にわたっており、野球史研究が多様化している今日の状況に鑑みると、分散はある意味望ましい結果であろう。資料のオンラインデータベース化、デジタル画像公開を日米双方で進めることが今後の課題だ。

もともと「藤田コレクション」は藤田光彦という１人の人間の１つの時代、１つの側面を表す文物の集まりにすぎない。私が藤田光彦を紹介するのに今回のテーマと関係ないことまで紙面を割いたのにも理由がある。人は死んで

もすぐには消えない。近しい人の思い出として、さらには伝説として、有名無名の仕事として後に残る。しかしそれら部分をいくら繋ぎ合わせても、その人は再現できない。これらの断片がばらばらになり文脈から切り離されてついには忘れ去られる過程は、１つのアルバムがほどかれ散らばってゆく様に似ている。「藤田コレクション」は散逸することによって日米双方の野球史研究に貢献するだろう。ばらばらになり、１つ１つの文物から「藤田光彦」の名前が消えていくことによって、藤田光彦は足跡を残したともいえる。

© Kyoko Yoshida